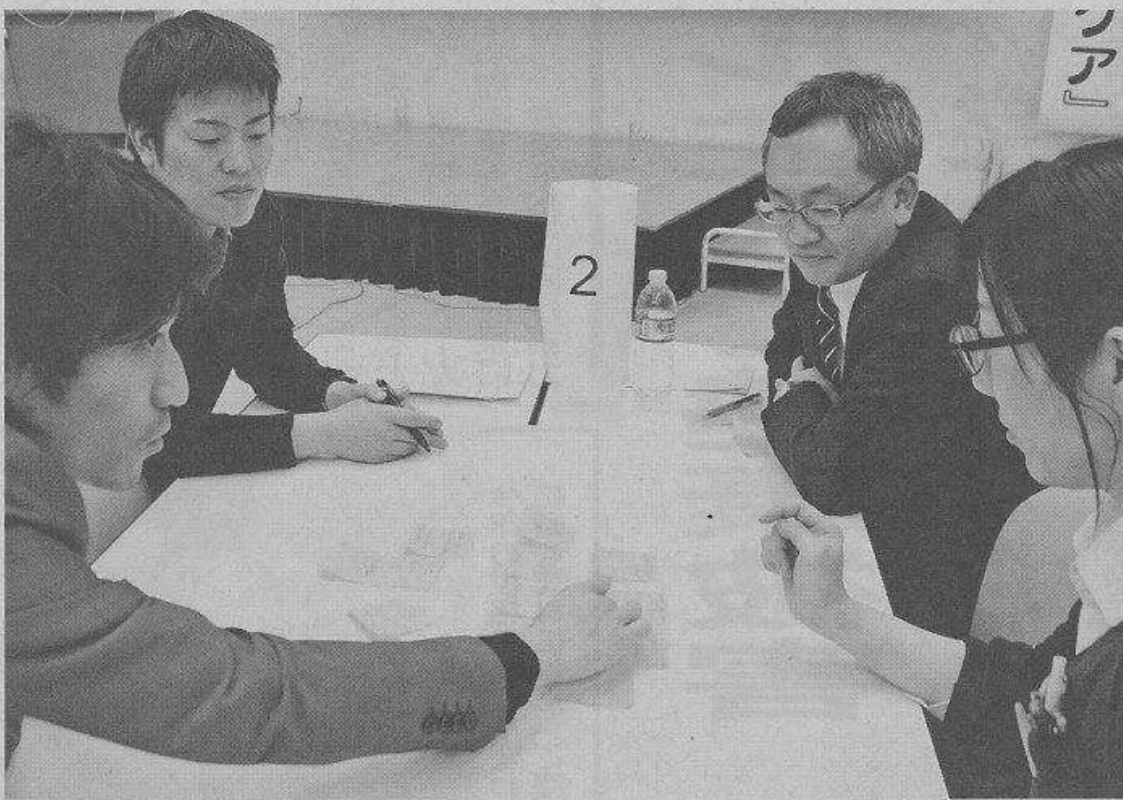


釧路の在宅医療や介護の現状を学ぶ研修会が、釧路市生涯学習センターで開かれた。参加対象をこれまでの看護師や社会福祉士など医療・福祉関係者から一般市民にも広げ、約80人が集まった。(光嶋るい)

在宅医療、介護 現状は

釧路で研修会 関係者、市民が意見交換

医療・福祉の連携を考える任意団体として2009年に発足し、今年9月にNPO法人に移行したCCL(くくる、杉元重治理事長)が22日に開催した。



釧路での在宅医療や介護の現状を話し合う研修会の参加者

釧路保健所の川上禎之企画総務課長は、終末期医療の治療方針の決定手順などを定めた指針について「マニュアル的な判断基準ではなく、現場でしっかり考えるため、どのような手続きを踏むべきかを定めたもの」と説明した。9年前から訪問治療や自宅でのみとりを行ってきた杉元理事長は、患者本人や家族、看護師らと治療方針を話し合い、自宅でのみとりにつなげた事例を紹介した。

参加者同士の意見交換では、終末期に望むケアを家族の間でいつ話題にするか―などについて話し合った。住み慣れた場所で最後まで暮らすための「地域包括ケア」や在宅医療を進めるための仕組みづくりが進む中、「病院で亡くなる方が安心」という人の意思も尊重すべきだ」との声もあった。